



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	断酒会にたどりついたあなたへ (1)
Author(s)	眞崎, 睦子
Citation	かがり火, 161, 16-16
Issue Date	2011-01-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62148
Type	article
File Information	kagaribi-1 .pdf



『かがり火』を手にとり、このコラムに目をとめてくださったあなた—そうです、あなたです。あなたは、一体どんな人でしょうか。

断酒会の会報だから断酒会員、アルコール依存からの回復を長年維持していらつしやる方でしょうか。それとも、家族や恋人・パートナーとして、大切な方の回復を支え続けてこられた方でしょうか。断酒会とやらに行くことをすすめられたものの、通い続けることを迷っていらつしやる方でしょうか。何度か通ううちに人間関係に疲れて断酒会が嫌になってしまった人でしょうか。「私はまだそこまでひどいアルコール依存症じゃないし、この人たちとは違う」と思われている方でしょうか。断酒会に行つてはみたものの、次々と自身の体験を話す人々を不思議そうに眺めている方でしょうか、それとも、話す前から涙があふれて止まらない方でしょうか。とにかく一刻も早く大切な誰かをアルコールの問題から救いたいとお考えの方でしょうか。それとも断酒会って本当にあやしい団体じゃないんだろうか、と不安な気持ちでいっぱいの方でしょうか。本当は、まだ断酒でできないけど、通うことだけは続けようと思つている方でしょうか。通うことをやめてしまったけど、やっぱり、また通い始めたい、しかし仲間から受け入れてもらえるかどうかと心配していらつしやる方でしょうか。あるいは断酒会の役職に忙殺され、誰か引き継いでくれる人、代わってくれる人はいないかな、とストレスでいっぱいになっている方でしょうか。

ここにあげたみなさんは、私がこれまで「酒害」という問題を通して出会った方々です。その誰にも共通するのは「断

酒会」という自助グループの存在を知っているということ、そして抱えていらつしやる問題から目をそむけず、解決の手掛かりを求めて続けていらつしやるということです。そして、残念ながら、これらのみなさんは、日本社会では数少ないグループに分類される方々、つまり少数派といえるでしょう。

「そういうお前は誰なのか？」

申し遅れました。私は、眞崎睦子(まさきむつこ)と申します。北海道の断酒会のみなさまに支えられながら、北海道

断酒エッセイ



断酒会にたどりついたあなたへ(1)

北海道大学大学院 准教授(教育学)

眞崎 睦子

大学の講義室で「社会問題としての飲酒」という講義を開いています。

「社会問題としての飲酒？」

そうです。私は医師ではありません。ソーシャルワーカーや臨床心理士、看護師の資格も持つておりません。直接、みなさまが抱える問題を解決することはできません、ごめんなさい。

「では、何をしているの？」

はい、なんとか、アルコール依存の問題が、「アル中」と

呼ばれる、「世の中の隅っこにいる、近寄らない方がいい人、どうしようもない人」と思われがちな方だけの特別な問題ではなく、家族や周囲の人々を巻き込む、一つの社会問題であることを、多くの人々に気付いていただくためにはどうしたらいいか、と考えています。そして、運よく断酒会にたどりついたみなさま方には、「なぜ断酒会のような自助グループが回復に役立つのか」「断酒会のような自助グループの健全なあり方とはどういうことか」などを語りかけていきたい、と考えています。そして、大学の講義室にあっては、入学者

の多くが楽しみ始める飲酒という行為には「負」の側面があるということを通して多くの飲酒事故と共に伝えることも加えています。

大学での授業は、受講者の所属学部や学年を問わない主題別科目「社会の認識」の枠組のなかで開講しています。ここでは、二冊の教科書—大変貴重な教科書を使用しています。授業初回に、受講者を対象とした「飲酒に関する大学生の意識調査」(無記名アンケート)を行っています。この調査結果と、毎回の授業で受講者全員が提出する感想をまとめた

ニューズレター、つまり受講者自身の、その週毎の認識が、一冊めの教科書です。二冊めの教科書、これこそが、札幌連合断酒会そして家族会のみなさまが講義室で語られるお話、そして質疑応答なのです。

さて、一冊めの教科書からその一部を紹介しましょう。「あなたは断酒会について(何か)聞いたことがありますか？」—この問いに「はい」と答える大学生の数は2002年以来、1割を超えたことがあります。この数字を海外の学会で紹介したところ、「たまたま、あなたが働いている地域の学生が知らなかっただけではないか」と問われたことがあります。いいえ、私が北海道大学でこの授業を開講したのは2005年のこと。それ以前に京都、大阪で調査をしたときも結果は同じでした。そして北海道大学には全国から学生が集まっています。断酒会について、何も聞いたことがないという大学生が9割以上いるのです。高度情報化社会と呼ばれる現代、この数字は一体何を意味するのでしょうか。

このように「断酒会」のことを聞いたこともなかった大学生が、酒害について学び、その上で、断酒会・家族会のみなさまとの間に繰り広げた質疑応答とその後の話、そして、私を勉強会や研修会にお招きくださった札幌や北見の断酒会に連なる方々との出会いなどを、このコラムを通して、すべての読者のみなさま、お一人おひとりの「あなた」と分かち合いたいと考えています。また次回の「かがり火」で、お目に

眞崎睦子(まさき むつこ)